目次

序
本書の文学史的区分について

前篇　近代前期

一　新文学胚胎……三
安愚楽鍋　仮名垣魯文……八
柳橋新誌　成島柳北……一〇
花間鶯　末広鉄腸……一三

二　新文学形成
1　写実派・理想派……一七
小説神髄　坪内逍遙……二三
浮雲　二葉亭四迷……二六
あひびき　二葉亭四迷……三〇
胡蝶　山田美妙……三四
縁外縁　幸田露伴……三七
たけくらべ　樋口一葉……四三
二人比丘尼色懺悔（自序）　尾崎紅葉……四七
金色夜叉　尾崎紅葉……五〇

早稲田文学の没理想　森鷗外……五五
短歌抄　正岡子規……五八
俳句抄　正岡子規……五九
短歌抄　落合直文……六〇
短歌抄　佐佐木信綱……六一
俳句抄　内藤鳴雪……六三
2 浪漫主義・写実主義……六四
内部生命論　北村透谷……六九
姉崎嘲風に与ふる書　高山樗牛……七五
高野聖　泉鏡花……七八
春の鳥　国木田独歩……八三
若菜集序　島崎藤村……八六
おえふ　島崎藤村……八七
鷺の歌　上田敏……八八
朝なり　蒲原有明……九〇
あゝ大和にしあらましかば　薄田泣菫……九五
短歌抄　与謝野鉄幹……九六
短歌抄　与謝野晶子……九七
俳句抄　高浜虚子……九八
漱石漢詩　夏目漱石……九九
俳句抄　夏目漱石……一〇〇

後篇　近代後期

一　近代文学発生……一〇二
破戒　島崎藤村……一〇四
自然主義の価値　島村抱月……一一〇
妻　田山花袋……一一五
何処へ　正宗白鳥……一一九
恥溺　岩野泡鳴……一二三
黴　徳田秋声……一二七
三四郎　夏目漱石……一三〇
高瀬舟　森鷗外……一三七
短歌抄　長塚節……一四七
短歌抄　伊藤左千夫……一四八
短歌抄　若山牧水……一四九
短歌抄　石川啄木……一五〇
俳句抄　河東碧梧桐……一五三
二　近代文学形成
1 新浪漫主義……一五五
冷笑　永井荷風……一五八
麒麟　谷崎潤一郎……一六三
歌行燈　泉鏡花……一七〇
田園の憂鬱　佐藤春夫……一七四
邪宗門秘曲　北原白秋……一八〇

現身　三木露風……一八三
俳句抄　荻原井泉水……一八四
2人道主義……一八六
出家とその弟子　倉田百三……一八八
カインの末裔　有島武郎……一九四
幸福者　武者小路実篤……一九九
暗夜行路　志賀直哉……二〇四
秋の祈　高村光太郎……二一〇
三　近代文学瀾熟
1新現実派……二一三
父帰る　菊地寛……二一五
奉教人の死　芥川竜之介……二二三
蛙よ　萩原朔太郎……二二七
短歌抄　島木赤彦……二二九
短歌抄　斎藤茂吉……二三〇
2新感覚派・無産派……二三三
蠅　横光利一……二三六
海に生くる人々　葉山嘉樹……二四〇
雪国　川端康成……二四四
私小説論　小林秀雄……二四七
雨ニモマケズ　宮沢賢治……二五二
俳句抄　水原秋桜子……二五六

四　戦後文学（昭和二十年代）……二五七
細雪　谷崎潤一郎……二五九
赤蛙　島木健作……二六四
播州平野　宮本百合子……二六七
斜陽　大宰治……二六九
乗合自動車　井伏鱒二……二七三

いてから、その作風・態度が期せずして、当時文壇の潮流の中心を示すかの感があった。「足跡」（四十三年）「徽」（四十四年）、大正に入って、「爛」「あらくれ」を書き中年の愛欲の葛藤を細写した。九年花袋と共に誕生五十年の祝賀会があり、その後も通俗小説執筆の傍、「風呂桶」（十三年）「籠の小鳥」（十四年）「折鞄」「元の枝へ」（十五年）等好評作を出して、いわゆる心境小説に人生的苦悩と透徹した諦観を示した。昭和に入ってから「和解」（八年刊）「仮装人物」（十二年刊）に文壇の視聴を集め、十二年には帝国芸術院会員となり、更に戦時中「縮図」（中絶）の執筆等撓まない筆力を示したが、十八年十一月十八日没した。年七十三。「秋声全集」十五巻（昭和十一年―十二年）がある。

参考　徳田秋声　舟橋聖一（昭一六）　秋声　秋声遺跡保存会編（昭二五）

三四郎　夏目漱石

谷中と千駄木が谷で出逢ふと、一番低い所に小川が流れてゐる。此小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。川は真直に北へ通つてゐる。三四郎は東京へ来てから何遍此小川の向う側を歩いて、何遍此方側を歩いたか善く覚えてゐる。美禰子の立つてゐる所は、此小川が、丁度谷中の町を横切つて根津へ抜ける石橋の傍である。

「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いて見た。

「歩きます」

二人はすぐ石橋を渡つて、左へ折れた。人の家の路次の様な所を十間程行き尽して門の手前から板橋を此方側へ渡り返して、しばらく川の縁を上ると、もう人は通らない。広い野である。

三四郎　熊本から初めて東京に出た大学新入生小川三四郎は、専科生佐々木与次郎と知合い、与次郎の寄宿する広田先生の許に出入りし始め、其処で里見美禰子を知った。同時に同郷の先輩野々宮理学士その妹よし子とも交際が始まり、三四郎は劃然とした三つの世界を知った。老母のいる故郷の片田舎の世界、それは既に三四郎が脱ぎ棄てた世界である。次は広田先生や野々宮理学士が没頭する図書館や研究室に代表される塵に埋れた学究の世界、そこへはまだ敢然と身を入れ得ない。最後に、美禰子やよし子の住む燦とした春の世界である。田舎出の余りにも初心な三四郎には都会育ちの大人びて聰明な美禰子の真情は謎である。清楚なよし子にも心を惹かれながら、三四郎は美禰子の不可思議な愛情に一歩々々魅せられて行く。広田先生は天空から慈母の如く眺めている。と、美弥子は突然新進美学者と結婚してしまう。三四郎の唇に浮ぶのは「ストレイ・シープ」（迷える子）の一語である。

明治四十一年九月一日より十二月二十九日まで東京朝日新聞に連載。翌年五月春陽堂発行。漱石全集第四巻、同普及版・決定版共に第五巻所収。

「野分」「虞美人草」等に色の濃かった道義的批判意識から脱けて、漸く大家の風格を示し始めた作品で、以後漱石の作品について廻る女性の「無意識なる偽善家」（Unconscious hypocrite）が、作中の美弥子として初登場する。全篇十三章、下文は、第五章の抜萃。

○菊人形―東京谷中団子坂に菊人形の小屋があった。毎年十月末

三四郎は此静かな秋のなかへ出たら、急に饒舌り出した。

「どうです具合は。頭痛でもしますか。あんまり人が大勢ゐた所為でせう。（略）」

女は黙つている。やがて川の流れから、眼を上げて、三四郎を見た。二重瞼にはつきりと張りがあつた。三四郎は其眼附で半ば安心した。

「有難う。大分好くなりました」と云ふ。

「休みませうか」

「えゝ」

「もう少し歩けますか」

「えゝ」

「歩ければ、もう少し御歩きなさい。此処は汚い。彼処迄行くと丁度休むに好い場所があるから」

「ええ」

一丁許り来た。又橋がある。一尺に足らない古板を造作なく渡した上を、三四郎は大股に歩いた。女もつゞいて通つた。待ち合せた三四郎の眼には、女の足が常に大地を踏むと同じ様に軽く見えた。此女は素直な足を真直に前へ運ぶ。わざと女らしく甘へた歩き方をしない。従つて無暗に此方から手を借す訳に行かない。

向うに藁屋根がある。屋根の下が一面に赤い。近寄つて見ると、唐辛子を干したのであつた。女は此赤いものが、唐辛子であると見分けのつく処迄来て留まつた。